

句集

朝明け

澤田
むべ

句集

朝

明

け

澤
田

む
べ

目 次

序やまだみのる.....	5
春 馬糞風
夏 白夜更く
秋 銀の匙
冬・新年 逝きてなほ
あとがき
	98	77
		49
		29
		11

序

親愛なる澤田むべさんがめでたく初句集を編まれることになった。

彼女から入門希望のメールが届いたのは二〇一九年の秋も深まつた頃であった。日本登山家として著名であつたご主人が、その年の五月にロシアの山で滑落死されたという仔細も併せ知り驚愕したのである。

父逝きて忍び泣く子に白夜更く

48

一人のお嬢さんと異国での火葬に立ち会われた。登山家の妻として心の何処かでは覚悟があつたと後に聞いたが、なんともつらく永い一日であつたことだろう。その切なさがこの一句にただようのである。

クリスチャンとして神を賛美する俳句が詠みたいというのが彼女の希望であったが、そのためにもまずは客観写生に徹することを約束した。自然界の摂理に感動して十七文字に写すことは創造主を賛美することにほかならないと信じるからである。

そんな彼女の努力の成果から代表的な作品を紹介して序に代えようと思う。

蝦夷の旅もてなしならめ馬糞風

16

蝦夷地での輸送手段は昭和初期まで馬車や馬橇であつた。馬たちの落とした糞は雪に埋まっているが雪解けとともに春の強い風に乗つて街に飛んできたという。これが春の札幌名物「馬糞風」として季語となつた。牧場近くでは今も体感できると思う。決して心地よいものではないが、それをウエルカムと捉えたところが面白い。

独り寝に夜干の梅の匂ひけり

35

土用干しの梅は三日目の夜だけは取り込まないで夜露にあてることで皮がやわらかくなるという。クリスチャンの作者にお盆の概念はないが、この時期は誰彼となく人恋しくなる。窓越しにただよう酸っぱい梅の香りがなおそれを募らせるのだろう。

パフェ崩しながら秋思の銀の匙

55

頭脳労働の疲れを癒やすべく茶房に入つて甘いパフェを注文した。山のように積まれた具に躊躇いながら物憂い気分が湧いてきてスプーンが止まる。銀の匙は裕福さの象徴とされていることから、恵まれているはずなのに何となく心が満たされないというような矛盾した憂鬱さを連想させるのである。

亡き夫の宛名で届く春だより

26

逝きてなほ続くお歳暮夫の縁

80

人の優しさはその人が他者から注がれた優しさへの反映だと思う。ご主人亡きあと
も覚えてくださる変わらぬ好意に感謝しつつ、周囲の誰にも優しい気配りのできたご
主人の為人が偲ばれるのである。

むべさんはプロテスタントのクリスチャンだが、長く求道者であつたご主人はロシ
アへ出発される前に信仰告白をされたという。これもまた奇しき神のご計画であつた
と思う。ご主人への思いを詠んだ作品も盛り込み、祈りつつ編んだこの句集は必ず天
国へも届くと信じている。

昨今はメンバーの高齢化で『ゴスペル俳句』の活動も沈滞気味だが、むべさんを中心とした武蔵野女子会の熱心が今の私の励みとなっている。さらなるメンバーが増し加えられ、その活動が神の祝福の座となるようにと願つてやまない。また折りに触れて私の弱さのために祈つて励ましてくださる優しさにも感謝している。句集の序を借りて心からのお礼を申し添えたい。

令和七年十一月七日

やまだみのる

春

馬
糞
風

槌音のまだ鳴りやまぬ遅日かな

春水や太古の地層滲ませて

大工らの紫煙くゆらす春の昼

春陰や夫の名なぞる共同墓

弱小部全員レギュラー風光る

一斉に祈る手のごと白木蓮

桜 餅 商 ひ 繙 ぎ て 三 百 年

春 眠 の 手 か ら ス マ ホ の 滑 り 落 つ

雨 け ぶ る 東 京 タ ワ リ 昭 和 の 日

夭折のちひさき墓に春の雪

春塵の古書運びだす棚卸し

旅の荷に聖書をしまふ入学子

蝦夷の旅もてなしならめ馬糞風

蝦夷地 発つ翼下の大地 春霞

クロツカス北の大地を割りて出づ

藤の肩拵ひて座るベンチかな

くるくるとえご散る風の山路かな

咲き揃ふ立浪草の波がしら

湧き水にあそぶ春日を一掬す

蒼天に放物線や福の豆

太鼓打つポニーテールや節分会

逆立ちに蜜吸ふめじろ梅万朵

この道や馥郁として夜の梅

団欒のごと寄り咲きし福寿草

ホー ル 出 て 春 雨 傘 の 華 や ぎ ぬ

竹 林 の く い ゼ に 溢 る 春 の 雨

斑 雪 野 と な り し 朝 に 鶴 さ わ ぐ

老ひ母の春愁を受けとめにけり

蒼穹を黄で刷くごとく花ミモザ

白子干混せてお日さま匂ふ飯

やぐらからつぎのやぐらへしじみ蝶

焼杉塀つづく古町木の芽晴

広庭は落花畠や療養所

帰北の吾子見送る駅に桜まじ

飛花の渦落花の渦やつむじ風

夕映に鏡びかりす柿若葉

祝福のごとく 総身に花吹雪

山椒の葉 平手打ちして若竹煮

花蛇の出入り 忙しき車輪梅

山裾に焼野かがよふ夜明けかな

白梅の殊に著しや蕊の影

間詰石より咲きいでし花董

亡き夫の宛名でとどく春便り

山茱萸の花にそぼ降る番所趾

半鐘のごとく窓打つ春霰

三 樅 の 花 の 香 気 を 潜 り け り

蛇 行 し て つ づ く 菜 の 花 堤 か な

八 方 へ 風 の 意 に そ ふ 雪 柳

落ちあふも離るるもあり花筏

歩道橋持ち上げてをる花の雲

登窯埋むなぞへの花菜畠

夏

白夜更く

風薰る祈りの道をもとほれば

百年の粧むろあり甘酒屋

司書のぼる細き梯子や書架涼し

ハンモック薄き一冊読了す

老犬の大引き溜息夜の秋

パノラマに積丹ブルー夏の潮

救急のサイレン止みて蝉時雨

出払ひし看護詰所や夜の秋

留学生筍飯に舌つづみ

郭公や空の奥行き思ひけり

蚊遣火や風入れ替はる夕の縁

釣忍しづく落とせる路地夕べ

白南風やデツキブラシのリズムよし

豆画伯らが画架立つる若葉道

湧水の滲みし苔の石涼し

擬宝珠の蕾をほどく夜明けかな

独り寝に夜干の梅の匂ひけり

しろしろと粉吹く節や今年竹

餡蜜のなかなか減らぬ二人かな

赤紫蘇の染みたる指でキーボード

芭蕉葉を庇としたる旧家かな

青芝にダイヤ散らしに雨上がる

山嵐しばしな吹きそ朴の花

渓風に紅ほぐれそむ楓の芽

薄紅と深紅の出会いふ薔薇アーチ

花殻を集めし袋薔薇香る

咲きのぼる葵まゝごと見守りぬ

青梅に仄と虹さす桶の中

苔庭に小人の傘よ梅雨蓑

池透けて見ゆ萍の細根かな

手で割きし水茄子漬や糠香る

皮剥けば真珠の照りや新玉葱

さくらんぼ最後の一つ譲りあふ

汗拭ふ版元總出荷積み終へ

水無月や銀糸のごとく日照雨過ぐ

背伸びして高きに結ぶ星の竹

魚道とてさ走る水の音涼し

藍玉の土間いつぱいに匂ひたり

トラックの下枝触れ行く夏木立

大雷雨天の水甕割れしごと

日に遊ぶ切子の翳や卓涼し

蒼き舌赤き舌見せかき氷

部屋の名は松杉檜避暑の宿

さらさらと囁くごとく竹落葉

咲き満ちて茉莉花邸となりにけり

墨流しめく雲に透け月涼し

なだらかな稜線映し田水張る

夏蝶の一頭夫の召天日

プラタナス並木の統ぶる緑夜かな

園児らの指すり抜けしあめんぼう

豊かなる湧き水藻花揺れやまづ

不揃ひもよしと青紫蘇庭に摘む

獸医へと炎熱の道急ぎけり

常滑の甕も干さるる梅筵

カムチャツカにて

父逝きて忍び泣く子に白夜更く

緑陰に夫の火葬を待つ異国

秋

銀
の
匙

蜩の間遠となりし湯屋の窓

狂ひなき研ぎ師の手元秋の水

けんけんば銀杏の実を踏むまじく

金色の芒の海に呑まれけり

杣道のしるべとなりし鳥瓜

身に入むや戦火に耐へし礼拝堂

元氣よと遺影の夫に胡桃置く

紅絹色の爆ぜんと孕む檀の実

煉瓦より赤き照葉や教會堂

病窓に切り取られたる秋の空

心地よき秋日の匂ふシーツかな

黙想の家に団栗落つる音

黄落の庭に手術の終はる待つ

里芋の吹きこぼれたる長電話

連獅子のごと草畠ち台風来

金にゆれ銀にそよげり芒の穂

和簾笥のひきだし重き秋湿り

パフエ崩しながら秋思の銀の匙

さやけしや駅頭に聴くバイオリン

十六夜にゆふべの残り団子食ぶ

青蜜柑剥きたる爪の芳しき

落人の道はこのへん花芒

肌掛けくるまる心地十三夜

あひ会釈して道譲る秋山路

ななかまど色づく蝦夷の大路かな

石庭の一水白く秋立ちぬ

かなかや友の墓石の真新し

竹林をめぐる葉擦れも秋の声

鉄瓶に秋草生けて画家の家

夜食いま版下を待つ編集部

母訪へば庭から声や小鳥来る

やや寒に香の立ちのぼる茉莉花茶

夕日いま真赭に染むる芒原

木洩れ日がシャツ模様なす小春かな

秋日影ガラス細工のバラ透かす

夕映の色もらひたる熟柿かな

大公孫樹北の大地に黄落す

黄落が窓覗きくる会議かな

頂に小さき天守や紅葉山

他人に聞く亡夫の逸話や長き夜

窓少し開け枕とす虫の声

白糸を吐くやうに咲く烏瓜

寝つかれぬ一間窓を月渡る

金平糖地にこぼすごと百日紅

角部屋に旅装を解けば虫しぐれ

やはらかき女将の訛り秋団扇

秋雲に透けて翼下に八ヶ岳

唐門は極彩色や小鳥来る

秋の日の水かげろふや櫓門

遣水を涉り茶室へ初紅葉

笹の葉の早瀬に逸る水の秋

吾子とゐる亡夫の書斎けふの月

秋風に譜面押さへし樂士かな

父の名を墓石に加へ秋彼岸

風通ふ稔田捨て田隣りあひ

秋涼の庵にお薄いいただきぬ

蕊あまた蒼穹を指す曼珠沙華

碑に防人歌や荻の声

キヤンバスにけもの道あり蝦夷の秋

秋天の高さ広さよ鳶一羽

芒原あかがねに染む落暉かな

秋さぶや古りしサイロの赤煉瓦

牧柵の途切れてポプラ秋の風

くわりんの実疵より放つ香氣かな

靴跡に象嵌めきし櫟の実

紅爆ぜて山路明るき檀の実

水鏡の青天井を鳥渡る

目薬の一滴鰯雲滲む

朝市のおまけにくれし島檸檬

櫛の森風にうべなひ黄落す

花茶屋に手桶をかへす秋彼岸

燈火親し栄枯盛衰物語

秋の蝶 一の谷へと消えにけり

黒松のますらをぶりや浜涼し

国生みの島へ秋潮またぐ橋

波止眩し秋日を弾く潮だまり

車窓いま綺羅の海坂須磨涼し

須磨夕焼け縮緬波を薔薇色に

吹き溜まる敦盛塚の落葉かな

秋の蚊に食はれもしたる異人館

釣り人の竿先暮るる秋の波止

冬・新年

逝きてなほ

探梅や歩き初む子に抜かれもし

登山具の夫の遺品に胼胝

北しぶく獣医は手術中と札

茶の花やいにしへ偲ぶ館跡

久闊の友より便り花八手

冬満月地球の影の仄かなり

逝きてなほ続くお歳暮夫の縁

歳取らぬ夫の遺影や年の暮

聖菓切る父にはりつく幼たち

寒 栢 の 裏 拍 取 り て 犬 吠 え ぬ

苑 小 春 お 散 歩 カ ー か ら 手 を 振 ら れ

一 燭 を 火 点 し 待 降 節 に 入 る

菓子を置く懷紙代はりに散紅葉

隼人瓜もらふ里山ハイキング

冬至粥亡夫のくれしブナの匙

煎り酒の匂ふ厨や雪しづり

煮凝や父の認知のふと戻り

形見るなるセーテーまくり皿洗ふ

時雨るるや滲みて届く喪のはがき

壳り文句華語や日語や市小春

冬落暉閉じし瞼に透けにけり

祈る手に燭の火影や聖誕祭

一穢なき冬青空へ父逝きぬ

古曆腰張とせる茶室かな

夫逝きし年の名残の古暦

受験子に握る小さき塩むすび

湿原の涸れて歩板の軋む音

葉 牡丹 の 同心円 に 色 深 む

昃 れば 人影 に 似 て 枯芭蕉

御神酒の香湯氣ごともらふ蒸饅頭

小夜時雨間遠となりぬ貨車の音

ゴブランを地に織るごとし柿落葉

ヒ首の月上げて冬山黒屏風

窓磨く胸に冬日の留まりぬ

ボインセチア胸に抱へし家路かな

武蔵野を烟らす落葉煙かな

船便で届くカードやクリスマス

薪割りの音響く里日短

モダンなる遺愛の火鉢蘆花旧居

冬至柚子一つ賜り奉仕終ふ

高窓に聖夜の帷をりにけり

天に星手に燭ともる聖夜かな

冬ざれの川筋をゆく一両車

日照雨過ぎほのと匂ひし枯葎

春く日金粉となる枯野かな

風花の高舞ふ伏見櫓かな

雪しまき消えては現るる島嶼かな

頂を雲居に置けり雪の富士

齊粥庭のはこべら摘みて足す

神在すと仰ぐ美空の淑氣かな

やはらかき手首を持ちて筆始

初茜視界展ける七合目

百稈の竹青々と淑氣満つ

松飾り梅結びなるめでたさよ

讃美歌を爪弾く箏や明の春

羽子つきの乾きし音や空まさを

吹初の尺八に添ふ朱唇かな



あとがき

夫が極東ロシアの山で滑落したのは二〇一九年五月、世界がコロナ禍へ突入する少し前のことでした。当時中学生だった娘たちとともに遺体引き取りのためロシアに赴いた日の雨に咽ぶ成田空港の景色を、今でもまざまざと思い返すことができます。

帰国後いくつかの変化を体験しましたが、中でも現実的に困ったことの一つは、毎週日曜日に通っていた教会の礼拝で、以前のように讃美歌を歌えなくなつたことでした。ドラムやギターなどバンドの奏楽で歌うコンテンポラリーの讃美歌は、夫を天に送つたばかりの私には少々賑やか過ぎたようです。手拍子のみの口パクで、礼拝者と

して神の御前に出るにはあまりにもお粗末な態度でした。

数か月が過ぎた頃、悩む私を心配した教会のある姉妹が「インターネットで『ゴスペル俳句』というサイトを見つけた」と頁を印刷して手渡してくれました。「バンドで朗々と歌わなくとも、五七五のリズムで神様を贊美できるのでは?」とは彼女の言。早速サイトにアクセスしてみると、「みことばの処方箋」という頁に、読みなれたはずの聖書の節と内容に合った写真が掲載されており、心が安らいでいくのを感じました。主宰のみのるさん宛に、「小学生のときに国語の授業で作つたきりですが、勉強してみたいですね」とメールを送り、しばらくして「どうぞ、まずは十句できたら送つてみてください」とお返事をちようだいしました。今思えばなんと無謀なお願いだったこと

とか……あれから六年の月日が流れ、俳句以前に日本語の危うい私を根気強く^{いざな}指導くださり今に至ります。

毎日句会への投句が日課となり、ウェブ吟行句会への投句のため、都立殿ヶ谷戸庭園をベースに東京在住のメンバー（通称武藏野女子会）と月一回の吟行句会が定着しました。句作が生活の一部となると、植物や動物や昆虫へ自然と目と心が向くようになり、神の創造されたものの美しさや精巧さに圧倒され、乾いた心に水がしみこむようになに神の愛がしみてきます。

みのるさんの徹底した客観写生と即吟、多作多捨の教育方針は、ブルース・リーの名言「Don't think. Feel!（考えるな、感じろー）」を彷彿とさせ、初学者の多い武藏野

女子会は毎回必死の吟行句会ですが、支え合い励まし合える仲間の存在がありがたく、交わりの中でこそ育つ俳句の心があるなあと思います。

昨春はみのるさんが上京してくださり鎌倉吟行句会が実現、また今秋は私たちが神戸へおじやまして須磨浦吟行句会が行われ、関西メンバーのみなさんのおおらかさや温かさ、優しさを肌で感じるひと時となりました。

俳句を上手になりたくて……ではなく、讃美歌が歌えなくて……とゴスペル俳句の門をたたいた弟子はあまりいなかつたかもしれません、神のたしかな導きでこの六年間をゴスペル俳句とともに歩み、今ここに句集を上梓できる幸いを思います。

句集タイトルは旧約聖書の詩篇という書物からいただきました。

朝明けには あなたの恵みを喜び歌います。

私の苦しみの日に あなたが私の砦

また 私の逃れ場であられたからです。 (詩篇59篇16節)

「私」は詩篇の作者、「あなた」は神です。この作者は、人生の苦難や危機を通らざれたとき、神の眼差しを感じて、独りで立ち向かわなくともよいと悟るのです。真っ暗な闇から朝明けへと空の色が移ろうその中に、神の主権と摂理を感じながら……

最後に、句集を編むよう勧め序文を寄せてくださったみのるさん、校正の労を取つてくださった澄子さん、康子さん、装丁をしてくれた次女のアズキ、北海道で祈つてくれていた長女のハツカに心より感謝します。そして、主イエス・キリストの御名をあがめつつ、この句集を亡き夫澤田実に捧げます。

令和七年十一月三〇日

澤田 むべ

句集 朝明け

令和七年十二月十五日 発行

著者 澤田 むべ
装丁 澤田 アズキ
印刷 オンデマンドP